

福井県埋蔵文化財調査報告 第105集

中角遺跡 2

— I 区下層編 —

— 九頭竜川等河川改修事業に伴う調査 —

2 0 0 9

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、平成7年度から16年度にかけて、九頭竜川等河川改修事業に伴い、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した、中角遺跡発掘調査の成果のうち、調査Ⅰ区の下層調査成果をまとめたものです。

中角遺跡は、福井市中角町を中心とした九頭竜川北岸一帯に所在し、中世（上層）ならびに弥生・古墳時代（下層）の二つの遺構面を持つ複合遺跡です。この地域では、古くから土器などの遺物が採集され、中でも同町字多知地籍は、中世城館である「中角館」の跡地とされるなど、その存在は以前から広く知られていました。

Ⅰ区下層調査では、掘立柱建物群や周溝墓・土坑墓群などの遺構を伴う、弥生・古墳時代の集落跡が検出されました。特に、遺構の重複状況から、墓域から生活域への変遷が推測され、集落内で土地に対する利用意識が変移した様子がうかがわれます。

今後、これらの資料が、埋蔵文化財に対する理解をより一層深める手がかりとなり、また、本書が学術研究ならびに郷土史研究のためなどに、広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまでに、関係諸機関をはじめ、地区住民の方々など、多くの皆様から多大なご協力とご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 吉 岡 泰 英

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）が、建設省（現、国土交通省）九頭竜川等河川改修事業に伴い、平成7年度から16年度にかけて実施した中角遺跡（福井県福井市中角町宇社地ほか所在）の発掘調査報告書のうち、調査Ⅰ区の下層遺構調査成果をまとめた、「中角遺跡2 - Ⅰ区下層編-」である。
- 2 中角遺跡Ⅰ区下層調査は、建設省近畿地方建設局福井工事事務所（現、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所）の依頼を受けて、県埋文が実施し、主査 工藤俊樹（平成7・8年度）、同 月輪泰（平成9年度）、文化財調査員 中森敏晴（平成7～10年度）、同 白川綾（平成10年度）が担当した（肩書はすべて担当時）。
- 3 発掘調査は、平成8年2月19日から平成11年3月12日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成8年4月1日から平成21年3月31日まで、県埋文および中角遺跡現場事務所整理棟（平成15年9月30日まで）にて実施した。
- 4 本書の編集は主査 中森敏晴があたり、主査 田中勝之、嘱託職員 井之口茂、同 水谷圭吾と分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下のとおりである。
中森 第1～4章、第6章 田中 第5章第2節 井之口 第5章第1節 水谷 第5章第3節
- 5 中角遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合には、本書をもって訂正したものとして了解されたい。
- 6 遺跡の空中写真撮影・空中測量図の作成は株式会社バスコに、検出遺構の図化・挿図作成は株式会社セピアスに、土器の図化・挿図作成は国際航業株式会社に、それぞれ業務を委託した。石器の図化・挿図作成は田中が、玉作り関連遺物の図化・挿図作成は田中と水谷がおこなった。その他の挿図は主に中森と水谷が作成した。
- 7 検出遺構の写真撮影は工藤、月輪、中森、白川がおこない、写真図版作成は中森がおこなった。出土遺物の写真撮影および写真図版作成は、石器と玉作り関連遺物（未成品の一部）は田中が、それ以外は中森がおこなった。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は真北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。
- 10 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して県埋文に保管してある。
- 11 発掘調査に際しては、次の方々のご協力を得た（五十音順、敬称略）。
中野拓郎（敦賀市教育委員会）、森由佳（石川県埋蔵文化財センター）
- 12 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々よりご指導・ご教示を頂いた（五十音順、敬称略）。
浅野良治（永平寺町教育委員会）、寺井誠（大阪市文化財協会）、中司照世
- 13 発掘調査には、地元の方々のご協力を得た。また、遺物整理作業は、県埋文の整理作業員があたった。

凡 例

- 1 挿図の縮尺はすべて各図内に記す。
- 2 本書中で個々のビットについて記述するとき、ビットをp（例：ビット1→p1）と略記する。

目 次

	頁
第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡と周辺環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 遺跡の概要	
第1節 層序	12
第2節 遺構の分布状況	14
第3節 遺物の出土状況	14
第4章 遺構	21
第5章 遺物	
第1節 土器	56
第2節 石器	72
第3節 玉作り関連遺物	74
第6章 まとめ	
第1節 遺跡	80
第2節 予察	82
報告書抄録	巻末

写真図版目次

- | | | | | | |
|------|----|-------------------|-------|----------------|--|
| 図版第1 | 遺跡 | (1) I区-①遺跡遠景 | 図版第9 | 遺構 | (1) 土坑31遺物出土状況 |
| | | (2) I区-①東半部 | | | (2) 土坑91遺物出土状況 |
| | | (3) I区-①西半部 | | | (3) 土坑147遺物出土状況 |
| 図版第2 | 遺跡 | (1) I区-②全景 | | | (4) 土坑186遺物出土状況 |
| | | (2) I区-③全景 | 図版第10 | 遺構 | (1) 土坑190遺物出土状況 |
| | | (3) I区-④全景 | | | (2) 土坑204遺物出土状況 |
| 図版第3 | 遺構 | (1) 周溝墓1 | | | (3) 土坑250遺物出土状況 |
| | | (2) 周溝墓2 | 図版第11 | 遺構 | (1) 土坑265遺物出土状況 |
| 図版第4 | 遺構 | (1) 建物1 | | | (2) 土坑298・299・300・
424・p803遺物出土状況 |
| | | (2) 建物2・3・4・6 | | | (3) 住居1 土坑遺物出土状況 |
| | | (3) 建物7・8・9 | 図版第12 | 遺物(土器) | |
| | | (4) 建物7 | 図版第13 | 遺物(土器) | |
| 図版第5 | 遺構 | (1) 建物8 | 図版第14 | 遺物(土器) | |
| | | (2) 建物10・井戸3 | 図版第15 | 遺物(土器) | |
| | | (3) 建物11 | 図版第16 | 遺物(土器) | |
| | | (4) 建物12・13 | 図版第17 | 遺物(石器・玉作り関連遺物) | |
| | | (5) 建物14 | | | (1) 石鏃・石錘・打製石斧 |
| | | (6) 建物15 | | | (2) 磨製石斧・敲石 |
| 図版第6 | 遺構 | (1) 建物16・17・18・19 | | | (3) 未成品(荒割・形割段階) |
| | | (2) 建物20 | | | (4) 未成品(形割・調整段階) |
| | | (3) 建物21 | 図版第18 | 遺物(玉作り関連遺物) | |
| | | (4) 建物22 | | | 管玉・ガラス小玉・白玉・
勾玉・垂玉・算盤玉・
未成品(研磨・穿孔段階) |
| | | (5) 建物23 | | | |
| 図版第7 | 遺構 | (1) 井戸4 上面遺物出土状況 | | | |
| | | (2) 井戸4 | | | |
| 図版第8 | 遺構 | (1) 溝45遺物出土状況 | | | |
| | | (2) 土坑46上面遺物出土状況 | | | |
| | | (3) 土坑46下面遺物出土状況 | | | |
| | | (4) 土坑75 | | | |

挿 図 目 次

	頁		頁		
第1図	中角遺跡位置図・試掘実施箇所図	1	第28図	土坑91・147・163・186実測図	41
第2図	調査I区区分図	3	第29図	土坑190・204・250・258・423実測図	42
第3図	調査風景（I区-①）	5	第30図	土坑265・266・298・299・300・ 424・428・p803実測図	43
第4図	調査風景（I区-③・④）	6	第31図	土坑425・住居1土坑実測図	44
第5図	中角遺跡周辺の地形図	7	第32図	遺構実測図（1）	45
第6図	中角遺跡と周辺の 弥生・古墳時代遺跡分布図	9	第33図	遺構実測図（2）	46
第7図	土層柱状模式図	13	第34図	遺構実測図（3）	47
第8図	調査I区下層遺構全体図	15・16	第35図	遺構実測図（4）	48
第9図	調査I区下層遺構位置図（1）	17・18	第36図	遺構実測図（5）	49
第10図	調査I区下層遺構位置図（2）	19・20	第37図	遺構実測図（6）	50
第11図	周溝墓1実測図	22	第38図	遺構実測図（7）	51
第12図	周溝墓2実測図	23	第39図	遺構実測図（8）	52
第13図	建物1・2・3実測図	24	第40図	遺構実測図（9）	53
第14図	建物4・6・7実測図	25	第41図	遺構実測図（10）	54
第15図	建物8・9実測図	26	第42図	遺構実測図（11）	55
第16図	建物10・11実測図	27	第43図	周溝墓・掘立柱建物出土土器実測図	56
第17図	建物12・13実測図	28	第44図	井戸3・4出土土器実測図	57
第18図	建物14・15実測図	29	第45図	溝出土土器実測図	59
第19図	建物16・17・18・19・20実測図	30	第46図	E11区土器集中地点出土土器実測図	60
第20図	建物21・22・23実測図	31	第47図	土坑出土土器実測図	61
第21図	井戸1・2実測図	33	第48図	土坑・ピット出土土器実測図	63
第22図	井戸3・5実測図	34	第49図	包含層出土土器実測図（1）	66
第23図	井戸4実測図	35	第50図	包含層出土土器実測図（2）	67
第24図	井戸4遺物出土状況図	36	第51図	包含層出土土器実測図（3）	68
第25図	大溝1断面図	37	第52図	石器実測図	73
第26図	溝45・大溝1実測図	38	第53図	玉作り関連遺物実測図（1）	75
第27図	土坑31・46・75実測図	40	第54図	玉作り関連遺物実測図（2）	76

表 目 次

	頁		頁
第1表 周溝墓一覧表	23	第8表 管玉観察表	78
第2表 掘立柱建物一覧表	32	第9表 ガラス小玉観察表	78
第3表 井戸一覧表	36	第10表 白玉観察表	78
第4表 主要土坑・ピット一覧表	44	第11表 勾玉観察表	79
第5表 土器観察表	69	第12表 その他の玉類観察表	79
第6表 石器組成表	73	第13表 未成品観察表	79
第7表 石器観察表	73	第14表 掘立柱建物属性一覧表	81

第1章 調査の経緯と経過

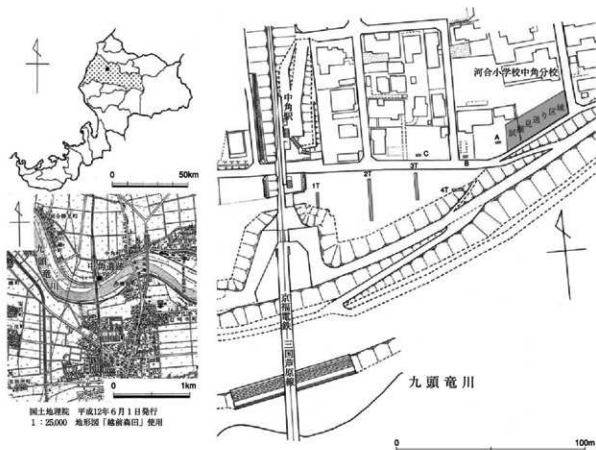
第1節 調査に至る経緯〔第1図〕

福井県最大の河川である九頭竜川は、福井平野のほぼ中央、福井市北部を西へ流れ、支流の日野川を合わせて北西に向かい、坂井市三国町で日本海に注ぐ。その福井市から三国町までを結ぶ京福電鉄(現、えちぜん鉄道)三国芦原線の九頭竜川橋梁付近は、川が曲流している上、川幅が極端に狭くなっており、九頭竜川治水事業における最大の難所とされていた。

建設省近畿地方建設局福井工事事務所(現、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所。以下、福井工事事務所)は、九頭竜川等河川改修事業の一環として、洪水時における九頭竜川および日野川の水位低下を図るとともに、福井市街地の河川水位を低下させ、治水安全度を向上させるために、九頭竜川の河道拡幅を実施する引堤工事を計画した。河道拡幅は京福電鉄九頭竜川橋梁改築(昭和57~63年度に実施)ともあわせて、北岸側に約2016haの用地を取得した上で、延長約640mにわたって、堤防を堤内地側に引いて新築することとなった。

一方、事業予定地となった福井市中角町一帯では、土器などの遺物の散布が古くから知られ、特に宇多知地籍は中世城館「中角館」の跡地に比定されるなど、遺跡としてすでに周知の土地柄でもあった。

以上のような経緯を経て、平成4年(1992)8月26日、福井工事事務所は事業予定地の一部について、埋蔵文化財試掘調査を福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文)に依頼、同年8月31日から9月1日にかけて、県埋文が試掘調査を実施した(第1図)。



第1図 中角遺跡位置図(左上:縮尺1/250,000 左下:縮尺1/50,000)・試掘実施箇所図(右:縮尺1/2,000)

調査の結果、第1～4トレンチとCグリッドでは、現地表下50～100cmに存在する茶褐色土層（上層）と、100～150cmに存在する黒褐色土層（下層）を確認した。これら2層は、上層が中世（南北朝期）遺物を、下層が弥生・古墳時代遺物をそれぞれ包含し、遺構も遺物同様、層位を異にして検出された。

また、A・Bグリッドでは、現地表下40～80cmに、後世の埋め戻しと見られる玉石の堆積を、その下層80～110cmに、中世および弥生・古墳時代の遺物が混在する黒褐色土層をそれぞれ確認した。玉石の埋め戻し層は、かつて周辺が低湿地であった事実を示すとともに、当地が中角館跡比定地の外縁部に近いことから、館の環濠跡に相当する可能性も想定された。

結論として、本遺跡は2時期の異なる層位を有する複合遺跡であり、その範囲は事業区域全域におよび、遺存状況はきわめて良好、出土遺物も多量という、非常に密度の濃い内容であることが判明した。

以上の調査内容に基づき、工事実施前には記録保存のための本格的調査の実施が必要となる旨を福井工事事務所に回答したが、ただちに調査対応についての具体的な協議はされなかった。ただ、すでに事業は開始されて久しく、さらに事業には堤防上を走る市道の改修、具体的には三国芦原線の踏切を廃して、市道を線路の高架下に通す立体交差化事業も含まれていたため、事業進捗を求める地元の声は日々高まりつつあった。

平成6年（1994）に入り、福井県教育庁文化課、県埋文、福井工事事務所の三者は合議の末、九頭竜川等河川改修事業の一環として当時実施中であった菅谷烏帽子遺跡発掘調査を、平成6年度末で一旦中止し、平成7年度より中角遺跡・中角館跡発掘調査へ調査体制を振り替えることで合意に達した。

なお、工事計画区域の一部が、中角館跡比定地にきわめて近接していたため、本発掘調査事業における遺跡名は、「中角遺跡・中角館跡」とされた。しかし、結果として、館本体もしくはそれに関連すると断定し得る遺構や遺物は検出されなかったため、本書での遺跡名は「中角遺跡」のみとした。

第2節 調査の経過〔図版第1・2、第2～4図〕

(1) 全体の経過

中角遺跡発掘調査は、平成7年(1995)5月23日より開始し、平成16年(2004)12月8日に終了した。調査区の総延べ面積は21,148㎡(10,574㎡×上下2面)を測る。

調査区は、京福電鉄三国芦原線を挟んで、上流側（東方）の調査区をⅠ区、下流側（西方）の調査区をⅡ区とし、Ⅱ区のさらに下流側の送電線鉄塔移設予定地をⅢ区とした。

調査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の各延べ調査面積と調査期間は以下のとおりである。

Ⅰ区 5,380㎡(2,690㎡×上下2面)：平成7年5月23日～平成11年3月12日

Ⅱ区 15,480㎡(7,740㎡×上下2面)：平成8年7月15日～平成16年11月26日

Ⅲ区 288㎡(144㎡×上下2面)：平成16年8月18日～12月8日

当初は、Ⅰ区調査完了後にⅡ区調査へ移行する予定であったが、Ⅰ区は生活域にあって、調査開始時にも住宅地・市道・学校敷地などの未整備地が含まれていた。それらは各側の事情により、調査に入れる時期が異なっていたため、時期を順次待ちながら、漸次的に調査を進めた。

一方、Ⅱ区はその大半がすでに立ち退き済みの工場跡地で、即時調査が可能であったため、Ⅰ区調査完了を待たずに、平成8年度より順次調査に着手した。

その後、平成11年度には、鳴鹿大堰建設に関わる東古市地区暫定盛土工事に伴う東古市縄手遺跡現地調査に対応するため、平成11年(1999)6月23日から同年11月1日まで、調査を一時中断した。また、平

成16年度に調査を実施したⅢ区は、非常に小規模であったため、Ⅱ区と同時に調査を進めた。

以上、途中4ヶ月弱の中断を挟んだものの、本調査は開始から終了まで9年5ヶ月にわたる、長期かつ大規模なものとなった。その成果も膨大であるため、調査報告書の構成は、Ⅰ区とⅡ・Ⅲ区の調査区で二分し、各々を上・下層でさらに二分する、計四分冊構成とした。

報告書の刊行順と内容は、以下のとおりである。

1. 中角遺跡1 - Ⅰ区上層編 - (Ⅰ区上層調査成果：平成19年度既刊)
2. 中角遺跡2 - Ⅰ区下層編 - (Ⅰ区下層調査成果)
3. 中角遺跡3 - Ⅱ・Ⅲ区上層編 - (Ⅱ・Ⅲ区上層調査成果)
4. 中角遺跡4 - Ⅱ・Ⅲ区下層編 - (Ⅱ・Ⅲ区下層調査成果)

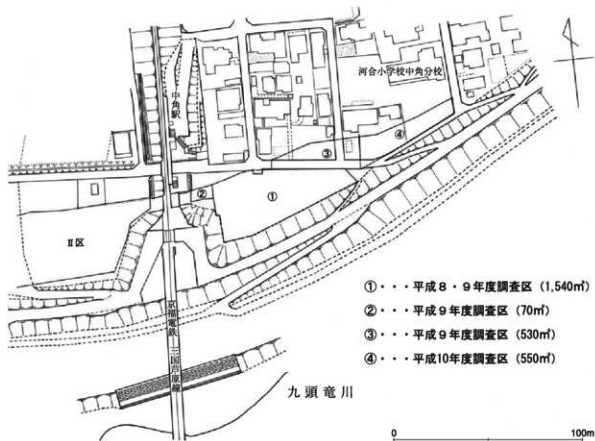
本書は「中角遺跡2 - Ⅰ区下層編-」であり、Ⅰ区下層調査成果をまとめたものである。

(2) Ⅰ区下層調査の経過

調査Ⅰ区の区割と各面積、および下層調査期間は以下のとおりである(第2図)。

- ① (1,540㎡)：平成8年2月19日～平成9年3月31日
- ② (70㎡)：平成9年12月9日～平成9年3月31日
- ③ (530㎡)：②に同じ
- ④ (550㎡)：平成10年11月26日～平成11年3月12日

グリッド割りは一辺を5mとし、南北をアルファベット(A～M)、東西にアラビア数字(1～26、98～100)を付してグリッド名とした。



第2図 調査Ⅰ区設定図 (縮尺1/2,000)

下層調査は、平成7年(1995)に実施したⅠ区-①の上層調査を引き継ぐ形で、平成8年(1996)2月より開始した。当初、Ⅰ区-②・③・④についても、平成8年度から順次着手できる予定であったが、立ち退き等の整備事業が遅延したために、Ⅰ区-②・③は平成9年度へ、Ⅰ区-④は平成10年度へそれぞれ先送りされた。一方、その先送りによる調査面積不足を補い、事業全体の進捗を図るため、即時調査が可能であったⅡ区について、平成8年7月より上層調査(1,000㎡)に着手した。そして、いずれも年度途中の決定事であったため、Ⅰ・Ⅱ両区とも年度内に調査を収束させるのは困難と判断、それらの総括をすべて9年度へ持ち越した。

平成9年度は、まずⅠ区-③について、市道の撤去とそれに替わる仮道敷設のため、Ⅰ区-①を東西で二分、6列以東の東半部を仮道敷設地として、平成9年(1997)8月に調査を完了させ、引き渡した。残りの西半部の調査については、Ⅰ区-②・③の上・下層調査と、Ⅱ区上層調査(9年度に500㎡拡張、前年度分と合わせて1,500㎡)をも含めて、年度末までにすべて完了させた。

平成10年度は、まずⅡ区(600㎡)の上層調査を9月までに完了させ、次にⅠ区-④の上・下層調査に移行し、年度末までに完了、Ⅰ区調査はすべて終了した。

以下、Ⅰ区下層調査の調査日誌を抄録する。

① 平成7～9年度

～平成7年度～

平成8年2月19日	下層調査開始。器材搬入・設置。
2月20日～	包含層掘削。玉類・原石など、玉作り関連遺物が散発的に出土、包含層や遺構覆土等を土のうに取り置いて、随時洗浄。
3月11日～	遺構清查・掘削。

～平成8年度～

5月8日	遺構覆土として、地山掘削排土による埋め戻し(黄褐色土)があることを確認。以降、各区で遺構再清查と見直し開始。
7月15日	Ⅱ区上層調査開始。
11月25日	遺構数の激増により、遺物取り上げのための遺構略図作成が滞ったため、株式会社イビソクに測量を依頼。以後、調査と併行して略図測量を随時実施(8年度のみ)。

～平成9年度～

平成9年5月13日	当年度実施予定のⅠ区-③調査に伴う、市道撤去および仮道敷設について、建設省と協議。調査区6列以東の東半部を仮道敷設地とし、夏頃までに引き渡すことで合意。
5月23日	周溝墓1、写真撮影。
7月29日～	遺構略図作成、遺物取り上げ。
8月13日	東半部空撮。のち、遺構個別写真撮影。
8月20・21日	全景・個別遺構写真撮影。東半部調査終了。

平成9年9月1日	土坑420検出。
9月16日～	土坑420を重点的に調査。
9月29日～10月3日	土坑420上面の遺物出土状況、写真撮影・実測・遺物取り上げ。
10月6日	I区-②・③上層調査開始。
10月7日	土坑420中央部に落ち込み検出、井戸4とする。
10月23日～11月4日	土坑420下面の遺物出土状況、写真撮影・実測・遺物取り上げ。
11月10日	土坑420完掘状況、写真撮影。
12月9日	I区-②・③下層調査開始。
平成10年2月13日～	井戸4底面直上に土器多数出土。
3月2・3日	井戸4底面出土遺物状況、写真撮影・実測・遺物取り上げ。のち、完掘状況写真撮影。
3月4～6日	土坑420および周辺部完掘、写真撮影。
3月10日～	遺構略図作成、遺物取り上げ。
3月28日	空撮。
3月30・31日	全景・個別遺構写真撮影。西半部調査終了。



第3図 調査風景（I区-①） 左上：包含層掘削 右上：清掃 左下：東半部整地 右下：遺物出土状況実測

② 平成9年度

平成9年12月9日～	上層調査終了後、器材再搬入・設置。包含層掘削。
平成10年2月13日～	遺構清查・掘削。
3月12日～	遺構略図作成、遺物取り上げ。
3月28日	空撮。
3月30・31日	全景写真・個別遺構写真撮影。調査終了。

③ 平成9年度

平成9年12月9日～	上層調査終了後、器材再搬入・設置。包含層掘削。
平成10年2月13日～	遺構清查・掘削。建物16・17・20、井戸5など検出。
3月10日	井戸5完掘、写真撮影。
3月26日	遺構略図作成、遺物取り上げ。
3月28日	空撮。
3月30・31日	全景写真・個別遺構写真撮影。調査終了。

④ 平成10年度

平成10年11月26日	上層調査終了後、器材再搬入・設置。
11月27日～	包含層掘削、遺構清查・掘削。
平成11年3月9日	河合小学校児童を対象に現地説明会開催。
3月10日	遺物取り上げ。
3月11日	空撮。全景写真撮影。
3月12日	個別遺構写真撮影。調査終了。

参考文献

九頭竜川流域誌編集委員会 編 2000『九頭竜川流域誌 水との闘い そして共生』九頭竜川水系治水百周年記念事業実行委員会



第4図 調査風景（I区-③・④） 左：包含層掘削（③） 右：遺構実測（④）

第2章 遺跡と周辺の環境

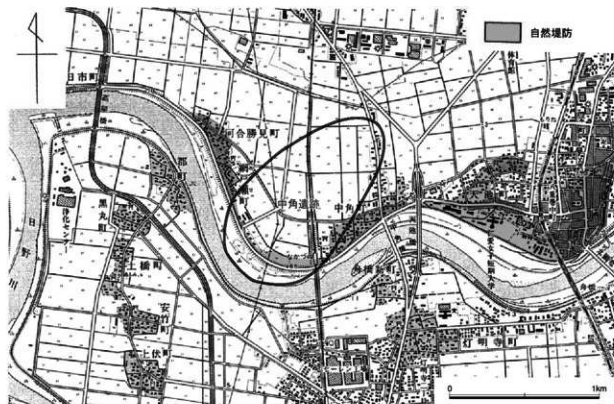
第1節 地理的環境 [第5図]

福井県は、昔の国名で言う越前と若狭の两国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がる付近に位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に、以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は古代の越前国にほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国と越前国敦賀郡までを含む。

嶺北地方に広大な水系を形成する九頭竜川と、その支流の中でも特に長大な日野川・足羽川による、相乗的な沖積作用で形成されたのが福井平野である。この平野をほぼ東西に横断する九頭竜川を境に、北部地域は特に坂井平野とも呼ばれ、その坂井平野の南端部、九頭竜川と日野川の合流域付近の九頭竜川北岸一帯には、かつて禁裏御領（皇室の荘園）として開発・経営された、河合庄が存在したとされる。現在でも、「河合」の名は地区名として地元に強く根付いており、中角遺跡の所在する福井市中角町は、その河合地区の南端部に位置する。

中角は九頭竜川の渡し（渡船場）の一つとして、古くから有名であり、交通の要衝であった。また、九頭竜川と日野川との合流点にも近く、江戸時代には「米河戸」とも呼ばれ、年貢米の積み出しがおこなわれるなど、近代に入って陸運手段が急速に発達するまでは、陸路と水路の両利を得た通運拠点として、活用されていたものと考えられる。

地形的に見ると、現在の中角集落は、主に九頭竜川北岸に展開する広大な自然堤防（第5図朱網掛部）上に立地している。中角遺跡の推定総面積は70万㎡あまりにおよぶ¹（同図朱線枠内）が、やはりその中心は、中角集落周辺の自然堤防上に展開しているものと推測される。



第5図 中角遺跡周辺の地形図（縮尺1/25,000）（国土地理院 2004 『1:25,000 土地条件図 福井』参照）

第2節 歴史的環境 [第6図]

ここでは、中角遺跡周辺域の主要な弥生・古墳時代遺跡のうち、特に近年の調査例について概述する。

剣大谷古墳群 (第6図3) 福井市剣大谷町・江上町に所在する。総数29基の墳墓が確認されている。

平成2年(1990)の土砂採取工事に伴い、2号墳の一部が破壊され、自然崩壊するに至り、隣接する同1号墳にも同様の懼れが懸念されたため、平成4年(1992)に福井市教育委員会が記録保存を目的に発掘調査を実施した。調査の結果、1号墳は南北14.00m、東西12.70mの方墳で、築造時期は弥生時代終末期～古墳時代前半に属するものと推測された。また、周辺からは、弥生時代後期に属すると見られる住居跡3棟と土坑2基を検出した。

法土寺遺跡 (第6図5) 福井市江上町字法土寺・字漆谷に所在する。平成6～11年度にかけて、国道417号改良工事に伴い、県埋文が調査を実施、弥生時代後期および古墳時代中期～後期の小規模な墳墓・古墳群を検出した。墳墓・古墳は総数で36基を数えるが、特に後期古墳は19基と、全体の半数を占め、そのほとんどが横穴式石室を内蔵する。また、中期古墳である22号墳には、頭甲・肩甲が副葬され、本古墳群内でも突出した内容を誇る。

漆谷遺跡 (第6図6) 福井市江上町字漆谷に所在する。国道416号改良工事に伴い、平成5年度に県埋文が調査を実施、後期古墳を主体とする古墳群、ならびに中・近世墓群を確認した。古墳は総数で5基を検出し、うち1～4号墳が横穴式石室を内蔵する後期古墳である。いずれも副葬品を伴い、中でも1号墳からは馬具・装身具・工具類・須恵器など、質・量とも他を圧倒する豊富な副葬品が出土している。墓の規模や出土遺物の時期・内容、石室の形態などから推測して、本古墳群は1号墓を盟主墓とした支群であり、北部九州の影響を強く受けて造営されたものと考えられる。

深谷古墳 (第6図8) 福井市深谷町に所在する。昭和44年(1969)に土砂採取工事に伴い、発見された。その際、福井市教育委員会が調査を実施し、横穴式石室を内蔵する、直径約11mの円墳1基を確認した。出土した須恵器は6世紀後葉のものとして推定される。

石盛遺跡 (第6図15) 福井市石盛町に所在する。森田北東部土地区画整理事業に伴い、平成14・15・18・19年度の4ヶ年度にわたって、福井市文化財保護センターが発掘調査を実施、下層面より古墳時代の集落跡や弥生時代の環壕の一部を検出した。

高柳遺跡 (第6図20) 福井市高柳町に所在する。縄文時代晩期～近・現代にわたる複合遺跡で、市場周辺土地区画整理事業に伴い、平成10年度以降、福井市文化財保護センターが30余次にわたる調査を実施している。弥生・古墳時代の遺構としては、方形周溝墓・四隅突出型墳墓や掘立柱建物などのほか、治水工事跡と見られる槽状の杭列や盛土の跡も検出されている。

菅谷烏帽子遺跡 (第6図22) 福井市菅谷町字烏帽子に所在する。九頭竜川等河川改修事業に伴い、平成5・6年度および17・18年度に県埋文が発掘調査を実施し、弥生時代および奈良・平安時代の集落跡であることを確認した。弥生時代の主な遺構として土坑墓3基が検出され、当時は墓域であったと考えられる。なお、土坑墓出土土器の年代は弥生時代中期に比定される。

開発遺跡 (第6図27) 福井市開発町に所在する。福井市文化財保護センターが、平成8年度に試掘調査を、平成10・11・17・19年度に発掘調査(1～4次)をそれぞれ実施した。3次調査では弥生時代中期の貯蔵穴1基が、4次調査では弥生時代中期～後期の溝や土坑などがそれぞれ検出されている。

深谷古墳群 (第6図28) 福井市深谷町・下市町に所在する。前出の深谷古墳とは全く別の古墳群で、円墳1基および方墳7基の、総数8基の墳墓が確認されている。